



■イメージ先行 住民の関心どう高める

「未来社会」積極公開を

電気自動車の乗り心地やスピード感などのデータを集めるため、市民を対象にした試験を秋にも行うこという。実験を充実したものにすためには市民の協力も欠かせない。研究への関心を高め、高められるかが鍵を握りそうだ。

「高齢者にとっては、細かい情報を手に入りにくい。市はしっかりとアピールしてほしい」。六十代男性はこう注釈する一方、「公開すれば見に行きたい」と語る。七代男性は「目指す社会が実現できるとは思えない」と辛口だが、「高齢者のために研究するのはいいこと」と評価する。

「情報空間を基盤とした新しい移動の手段」「望ましいコミュニティの実現」(慶大)。こうした研究の意義と実現の可能性を地域に分かりやすく説明し、浸透させる必要もありそうだ。最も効果的なのは実際に目で見て未来を実感してもらうことだろう。自動運転や遠隔操作で地域を走る電気自動車の姿を早めに公開するのも一つの方法かもしれない。

「実験は知っているが、地元はも研究に対する疑問点が先立つの

情報技術(IT)と電気自動車を組み合わせ、高齢者や障害者が自由に移動できる「コ・モビリティ」社会づくりの実証実験が、栗原市の研修施設「細倉マインプラザ」(同市鷺沢)で月内に始まる。岩手・宮城内陸地震で準備作業に多少の影響があったものの、実験主体の慶大は「世界に貢献できる研究を進める」と意気込みは変わらず、連携協力協定を結んでいる市も同様に意欲を見せる。

「コ・モビリティ」実験始動(栗原市)

「実験は知っているが、地元はも研究に対する疑問点が先立つの」と懸念もある。

実験前なので、関心や期待より

(若柳支局・田村賢心)